

ガブ

つきの はこ

作品にこめたおもい

人と異なっていること、欠点と思われていることを持っていることで、いじめられたり、コンプレックスに悩んだりしがちです。

でも「違い」は欠点ではなく大切な個性。

自分を大切に生きていくことで、きっと人を大切にすることもできるし、人の役に立つ喜びを知ることもできると思うのです。

この星に生まれ、生きていることが、どんなに奇跡的で素晴らしいことか。そのことをいつも忘れられないようにしたいです。

原作

耳をかじられて、ぼくは、ショウヒンカチがなくなった。いっぴき残ったぼくを見て、

「兄弟の中でも一番の美犬だったのに」と、お母さんはため息をついた。

ぼくって、そんなにがっかりなの？

ある日、ぼくはタダでもらわれていくことになった。「タダ」って0円のことだって。

ぼくには1円の価値もないってことなの？

おなかの中がざわついて鼻のおくがキュンと痛くなり、泣きそうになってぼくは家を飛び出した。

家の外はこわい。暗い夜道で、光る目の怪物に追いかけられた。ドドドドッ！と地面をふるわせて追ってきたかと思うと、猛烈な勢いで駆けぬけていき、ぼくは、ぶわんと風に飛ばされて、土手からころがり落ちた。

いたたた。

起き上がってあたりを見回すと、近くに川が流れていて、草のにおいがした。鼻をくくんさせていると、

「なんだ、おまえ、どこから来た」

黒い大きな犬に、ジロリとにらまれた。

「ここはおいらのなわばりだ。よそ者はどっかへ行きな」

ふるえて足がすくんだ。

「おい、やめなよ。ほんの子犬じゃないか」

助けてくれたのは白いおじいさん犬だった。

「わしは徳次郎。おまえさんの名は？」

「名前はないよ。ショウヒンカチもないんだ」

徳次郎おじいさんは、ちょっとうつむいた。

そして、ついておいでと歩き出した。

土手をのぼり、団地の森を抜けると、芝生のある広場に出た。

「おまえさんの今夜のねどこだ」

木の下へのんちの足もとに、どこからか、くわえてきた紙の箱を置くと、徳次郎おじいさんは自分のねどこへ帰っていった。

箱の中はあったかい。閉じかけたフタのすきまから、チカチカ光る星を数えながら眠った。

「うわあ！」

うわあ！ 目をさますと、まん前に人間の子ども顔があって、び、びっくりした。

「かわいいっ！」

ぎゅうっと抱きしめられて、おしっこがでそうになった。これがアコちゃんとのびっくり、どっきりの出会い。

「うそ、こんな高そうなフレンチブルドッグ」とママさん。でもぼくはタダだよ。

「迷い犬じゃないのか？」とパパさん。

「だって公園のベンチの下でダンボール箱に入ってたんだよ。うちの子にしていいでしょ」

こうして、ぼくはアコちゃんちの家族になった。家族！ 名前もつけてもらった。

ガブ。ぼくの名前だよ。

耳をガブってかじられたからじゃないよ。

「天使さまの名前からもらったんだよ」って、アコちゃんがつけてくれたんだもの。

アコちゃんはぼくの耳をほめてくれる。

「きれこみがあってカッコいい。こんなすてきな耳は世界でガブちゃんひとりだよ」って。

くすぐたくて、ぼくは耳をかく。

ぼくはガブです。

こんど徳次郎おじいさんに会ったら、ありがとうを言って、ちゃんと名前を言うんだ。

天使さまの名前をもらいましたって。でも、天使さまってだれだろう。

ぼくはガブです。もう、アコちゃんの家族になって、ちゃんと名前もあるから、ショウヒンカチなんてあってもなくても平気です。

ぼくの耳は世界でひとつしかない、大事なものだってわかっているから。

どこかでアコちゃんが困っていたら、すぐに助けにいけるように、耳をピンと立てている。

遠くにいても、家族の声がきこえるように、いつも心をすませているんだよ。